
荒野を往く咎人

武倉悠樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

荒野を往く咎人

【Nコード】

N6697I

【作者名】

武倉悠樹

【あらすじ】

愛する人への想いを貫いた男と彼の侵した罪への贖罪の物語。

無限の荒野で歩みを進める男が一人。

頭のとっぺんからつま先まで、汚れていないところはないという
みすばらしい格好がまず目に付く。その身に纏うのはもはや衣の体
をなしておらず、元の色形を想像するのも難しい襤褸切れ。寒さか
ら身を守ることも、様相を飾ることも、服としてすべての機能を満
たしていないソレは唯一、男の汚らしさを際立たせる事のみ役立
っていた。

そんな襤褸切れではあったが、男はそのことを気にする様子もな
い。身にまとう物の汚れを気にしても仕方ないほどに、男自身が汚
れにまみれていたからだ。袖の付いた大き　目の貫頭衣からのぞく
手足の一部と首周り、そして頭、それらで垢に穢れていないところ
はない。

どれだけの時間手入れをしてないのだろうか、爪や髪や髭は無秩
序に伸び、不気味な醜悪さを放って、見るものに生理的な嫌悪感を
抱かせる。

垢によるくすんだ色と、もう一つ。凝固して肌にごびりつき鈍く
変色した血による黒。それが男の色だった。

靴に守られず、手や顔以上に汚れた足を引きずるようにして歩く
その男、名をトマスと言った。しかし彼以外の存在が認められない
この荒野で、名前の意味はさしてない。トマスの名を呼ぶ者はなく、
トマス自身の一人称によっても使われることのないその名はいまや
形骸化し、彼の記憶の底に沈殿している。

トマスの歩く荒野にはなににもなかった。あるのは、異様な圧迫感を醸しながら低く広がるどんよりとした灰色の空と、植栽も岩もなく、生命の息吹を一切感じる事のない赤茶けた大地のただ二つ。その二つがどこまでもどこまでも、無限に続く空間を独り歩き続ける男。見るものに地獄の沙汰を連想させる、異様な光景が意味する事はいったい何なのか。

その答えを知る男は黙々と歩を進めている。

前髪に隠れた瞳に虚ろな光を宿したトマスは、裸のままの足の裏が大地に削られ血だらけなこと、滴る汗が服を濡らし異臭を放っていることも気に留めることはない。漠とした荒野にはなにか目的地になりそうなものは見当たらず、そもそもトマスはうなだれた顔をあげようとはしていなかった。

その様からはどこかを目指しているようには見えない。にも関わらず一心不乱なトマスの足取りに迷いはない。薄汚れた身なりを気にすることなく、前を見ず歩くトマスの姿に狂気のようなものを感じるのも当然の事だった。

それほどにトマスが纏う雰囲気には鬼気迫るものがあつた。

幾時をこのように過ごしたのだろうか。引きずる足に軽快さなど微塵も感じられず、だらりと垂れ下がった腕はトマスが満身創痍であることを容易に想起させる。

しかし、それでもトマスが立ち止まることはない。

トマスが目指すのは唯一つ、それは赦しであつた。

音もなく、色もない。無限に続く大地を闇雲に歩み続けること。それがトマスに与えられた贖罪の一つだ。それを知っているからこそ、トマスは脇目も振らず、自らに課せられた責務を果たそうと命と心を削る。

トマスという男を語ろう。

貧民として生まれ、貧民として育ち、文字も数もしらぬ身であったが、彼はひたすらに勤勉で誠実な男であった。

自然とトマスの周りは善意と笑顔で満ちていった。彼自身がそれに満ちていたからだ。

やがて周囲の強い薦めを受けたトマスは宮廷の庭師として出世を遂げることになる。

家名すら持たぬ貧民の身ながら荘厳な世界の一端で働くことを許されたトマスは、自らが認められた喜びにふるえ一層仕事に精を出すようになっていた。

仕事で汗を流すことに励み、人々の笑顔を自らの喜びに変え、庭の木々や花々の彩りに心を動かす様な澄んだ魂を持ったトマスはやがて一人の女の想いを動かすことになる。

清廉なトマスに想いを寄せた女は輝く美貌と慈愛を備えており、名をフィリア・ヴィノ・シウルサフィーヌといった。トマスが勤める宮廷の主の愛娘である。

フィリアの恋心をトマスは迷い無く受け止めた。貧民と王族の恋など、叶わぬどころか、とても許されるべきものではないと踏みとどまらなかったのは、彼が愛にも真つ直ぐでありすぎたからだ。

やがてトマスとフィリアの愛の前に大きな壁が現れた。

貧民の出である一介の庭師に過ぎない男の、王の血に連なる高貴な愛娘への懸想を知ったとき、はその怒りに体中の細胞を震えたぎらせた。

王はすぐさまトマスを呼び出した。

百を越える騎士が周囲を取り囲み、首には三本の槍斧が突きつけられた体勢でトマスは自らの、そしてフィリアの愛を説いた。

自らの生殺与奪を握る、世界の王へと。

「王よ、なぜ、我らの愛を阻もうとしたもつか」

トマスの第一声に死を前にした脅えは一切感じられなかった。

「フィリアが本来なら視線を組交わすことすら叶わぬ高貴なる存在であることは存じております。ですが、我らは愛し合っております。愛より優先すべき理などこの世にありはしません」

王を前に、騎士団という王の権力を象徴する圧倒的な力を前に、トマスはそれまでと同様ひたすらに真つ直ぐであった。そしてトマスは、臆面も迷いもなく、自らとフィリアの愛の深さを語る。

「私が死んだと知らば、悲しみに暮れるフィリアも自らの命を絶つでしょう」

傲慢でも自己愛でもなく、ひたすらに互いの愛を信じる男はさらに言葉を紡ぐ。

「我を殺そうと言うならば、一瞬たりともフィリアを悲しませると無きよう、我ら同時に殺していただきたい」

自らへの他人の愛の深さを堂々と言いのけたその言葉は周囲をどよめかせる。

王の一声でいつでもトマスの首をはねられるよう、槍斧を構えていた騎士達の手が震えていた。

王は怒りに打ち震え言葉を発する事も叶わなかった。

王に向かって姫を殺せとのたまった男はただ一点、愛を武器に世界を統べる者を見つめる。しばしの逡巡の後、王は傍らに添う魔法使いに命じ、トマスに壮大な罰を言い渡した。

「フィリアと愛を交わしたくば、貴様の言う絶対の愛を壊して見せよ」

魔法使いが噎れた手に握る杖を振るうと世界が捻れた。

王の威厳ある声が響く。

「これから貴様の命は時を外れ、狭間の世界をさすらうだろう。その世界で貴様は百の愛を受け、貴様に愛を与えた人々を殺せ。それ

が貴様の贖罪だ。それを成さばフィリアとの愛を認めよう」

王の怒りは底の見えぬ巨大なものだった。

「唯一絶対の理である愛のために、愛を百度打ち砕いて見せよ」

自らに言い渡された贖罪の術を聞き、トマスは初めて愛の前にたじろいだ。自らの愛を貫くために、他人の愛を打ち砕くことは許されるのか。

答えを見つける前に、トマスの視界が歪み、意識が薄れていく。

気がつけば、トマスは荒野に独り立っていた。

朝も夜もなく、時間の感覚もおかしくなるような寂漠とした大地でトマスは悩んだ。なぜ自らの愛を貫くことが咎にならねばないのか。

悪を知らぬトマスは悩み続けた。

幾時を悩み抜いただろうか、トマスは荒野で一步を踏み出した。

トマスは真っ直ぐな男だった。フィリアへの愛を捨てることなど最後まで選べなかったのだ。

こうして、トマスは業を背負い歩み始める。トマスの地獄の贖罪は幕を開けた。

トマスが荒野を往けば其処には、魔法使いが用意した様々な世界が待っていた。

海の傍で命の恵みを受け、慎ましく生きる村々。

戦乱を繰り返し、人々の心が荒みきつた国。

太陽と雨に富み、豊かな穀物を実らせる森。

怒号と銀貨が飛び交う、夜の街。

風と雲で満たされた広大な大地。

行く先々の世界でトマスは様々な人間として生き、そしてたくさん
の愛を受けた。

子を孕めぬ妻の夫として。

数多の戦地を駆け抜けた猛将の愛弟子として。

幽山に住まう独り身の翁の拾われ子として。

話術巧みに稼ぐ豪商の世継ぎとして。

多くの豊かな愛を受けたトマスは滂沱の涙を流しながら彼らを殺
めた。

ひたすらにフィリアへの愛を唱え、トマスは愛を碎き続ける。愛
を碎き、自らを失い、理を捨て、それでもひたすらに彼は殺め続け
た。ただフィリアとの愛のために。

自らとフィリアの欲のために非道の極みに墮ちようと、彼はひたすらに前を見据え歩み続けた。

愛のために愛を砕く修羅となつて果てなき荒野を征く。

いくつの愛を裏切り、どれほど自分の心から湧き上がる嗚咽を耳にしたか。

トマスは限界を迎えていた。体のいたるところ、血で穢れていない部位など存在しない。そしてそれ以上に心が血に塗れていた。

もはやこの時トマスは、なぜ自分が自分を愛してくれる人々を裏切るのかすら分からない。地獄の果てで意味など既に喪失していた。

訳も分からず寂寞の荒野を進み、愛する人を傷つけるトマスを、それでも突き動かすものは何か。

トマスにはそれすらも定かではなかった。

魂に深く刻み込んだフィリアへの愛も苛烈な贖罪の前に磨耗していた。

幾度も愛を破いた末、未だトマスは荒野を歩み続けていた。

ふと、荒野を進むトマスの歩みが止まった。こうして立ち止まってしまうのは何度目を数えるだろう。

疲労が極みに達したのだろうか。それとも今まで疲れた体に鞭を打っていた心が完全に削げ落ちてしまったのだろうか。

しばしの間、棒のように立ち尽くしたトマスはやがて面を上げる。その目が捉えたものは、トマス以外のありとあらゆる存在を排したこの荒野にあつて、あまりに不自然な「門」であつた。

トマスの軀を包んでなお余りある縦横五メートルほどの正方形をした巨大な門が、何もないうちに思われたこの空間にいつの間にか佇んでいた。圧倒的な質量の金属の塊の中央には、荘厳な象嵌が施されており、手を取り合つた男女が一組描かれている。

トマスは何の想いも読み取るこのできない虚ろな瞳をまっすぐに扉へと向けている。下から滑る様に上がつていったトマスの視線が、門の中央、男女の模様のところで止まり、一瞬の動揺が瞳を泳ぐ。

その様に呼応したのか、突如、音もなく扉が開き始めた。門の閉じ目を中心にして、線対称に描かれていた男女をまるで引き離すか如く、門が重さを一切感じさせる事のない滑らかさでゆっくりと開いていく。

徐々に取り合つていた男女の手が離れて行き、やがて数秒の後、一人人がやつと通れるかという隙間を見せた扉が、動きだしと同様に音もなく止まる。

そこには新たな世界が広がつていた。

今まで何度、強き決意をもって門を潜くぐつた事だろう。そして、あと何度門をくぐらねばならないのだろう。

すでに思考は停止し、体のどこかに刻まれた情念の残滓にのみ突き動かされているトマスにはわからない。

考えることなどもうできなかった。できるのは、ただ、立ち止まらぬ事のみ。

トマスはそうして、フィリアへと繋がっているはずの道を、再び歩きだした。

門を抜けると、荒れ果てた大地は姿を消した。代わりに広がっていたのは、彩り鮮やかに咲き誇る花々と豊かに枝を茂らせた木々。そしてそこに集まる豊かな命であった。

桃源郷のような世界にトマスを迎えるがごとく薫風が吹き抜ける。

目を奪われるような光景を前に、しかし、トマスの瘦せこけた心は動かない。

よくよく見渡せば、花も木も無秩序に命を咲き乱れさせているわけではなかった。花々は色別に区分けされ、木々は均整のとれた形に剪定されていた。

遠くに聞こえる涼やかな水音は、噴水だろうか。

棘薔薇が巻きつき赤鮮やかに、飾り付けられた門柱。古ぼけてはいるものの、汚さを感じさせないベンチ。

広く、その果ては見えねども、どうやらここはどこかの庭園らしい。

今まで居た荒野とは見違えた、色彩鮮やかで豊かな命の息吹が感じる世界を、トマスはあてどなく彷徨う。

丁寧な世話の後が伺えるピラミダリスと石英岩で拵えられたアップローチを進むと、透き通る歌声が響いてきた。トマスはその歌に導かれるように歩を進める。

純白と黄金色に染まったフラワーアーチを抜けた先、大鷲の彫像の傍らに歌声の主は居た。

豪華なドレスを嫌味なく着こなした美女は、薫る風に艶やかな髪をたなびかせている。

集まった小鳥たちの囁りと噴水の水音にのせて、自らの声のみを頼りに天上の旋律を紡ぎだす彼女の存在に、トマスは暫し心を奪われた。

怒りも悲しみも、ましてや感動など荒野の果てで忘れたはずだった。

にも関わらず。

慈慕と煌びやかさを兼ね備えた存在感を放つ一人の美女に、修羅の贖罪の果てにとうに色あせていたはずのトマスの情動が揺さぶられる。

トマスが忘我に立ち尽くしていると、美女がトマスの存在に気づき、笑顔を向けた。

「あら、トマス」

この時、美女の呼ぶ名が自らの本来の名前で在ることにトマスは気づけなかった。長き間トマスは、誰一人トマスという彼の真の名を呼ばぬ荒野を歩んだ。幾度にわたりトマスは、彼の知らぬ彼となり数多の人々から異なる愛を受けた。トマスの中で、自分はトマスである、という自我はとうに失われていたのである。

だからトマスは幾多の世界でそうしてきたように、この世界で自分はトマスという人間なのだと半ば機械的に頭に覚え込ませる。そして、眼前の、恐らく手に掛けねばなくなるであろう美女に対して問いかけた。

「君は誰だったかな」

刹那、美女の微笑みが激しくゆがんだ。深く刻まれた眉間の皺が意味するものは、憤怒だろうか、悲哀だろうか。しかし凄絶な表情を浮かべたのも束の間、美女はすぐさま笑顔を取り戻すと、何事も無かったかのようにトマスの問いに答えた。

「何を言ってるのよ、もう。私よ、　よ」

突如、美女の言葉をさえぎるかの様に、小鳥たちがいつせいに飛び立った。重なり合う羽音でトマスは彼女の名前を聞きそびれる。

しかし、トマスは内心胸を撫で下ろしていた。相手を深く知れば知るほど、その命を奪うときの絶望と自身の呵責は深く昏いものとなるからだ。

その後、美女の名を知ることないまま、命豊かな世界でトマスは美女との愛を深めていった。

誰かの愛を受け続ける日々を送る事は、徐々にトマスの凍てついた心は溶かしていく。

しかし同時にトマスは自らがただの人間であると言う事を思い出し、自らに課せられた贖罪の重みに脅え震える時を送ることになった。いつそ何も感じない鉄の心であれば良いのにと願い、王の怒りの深さを痛感した。

そんなトマスに対し美女は真つ直ぐな愛を注いだ。まるで何かに取り付かれているかのごとく、美女は笑顔でトマスの名を呼び続けた。

トマスと美女は、花の彩の移り変わりを共に愛で、庭に住まう命の萌芽を共に喜び、朗らかな旋律を共に紡いだ。

やがて、トマスは自らの中に芽生え始めていた美女への愛に気づく。やがて来る瞬間への悲しみと恐怖に嘆き、そして自らの想いを認めないかのようにトマスは美女を君と呼び続けた。

君と呼ばれる度、美女には苦悶の表情が窺えた。その表情に、何か思うところがあるのだろうかとトマスは訝るが、深く問いたただすような事はしない。名前を呼んでもらえぬ事を不満に思っているのだろう程度に思っておく。自分が愛を感じ始めている美女を、自ら手に掛けねばならないことをトマスは知っているからだ。

互いに心の底を見せぬまま、それでも美女とトマスの愛は育まれて行く。

高らかに蒼穹が広がったある日、二人は庭園に住まう狐に恵まれた新たな命を喜び合っていた。そのとき突如、それまで休むことなく庭園に涼を与えていた噴水の水音が止まり、小鳥たちの囀りが止んだ。

時の隙間に転がり落ちたかのように庭園は静寂に包まれる。

その無音の意味を知るトマスは、ついに来るその時におののき息を飲む。

逆に突然の静寂に虚をつかれ、混乱しているのは美女のほうだ。周囲を見渡し、状況の確認をしようと慌てる美女の後ろ、対面するトマスの視界には巨大な門が現れていた。

それはこの世界の終わりを告げる門。贖罪を成す時が来た事を告げる審判の門だ。

その姿はトマスに今までの贖罪の数々を呼び起こした。悲しみが、怒りが、絶望が、愛が、感情の波濤がトマスの心で暴れまわり、壮絶な葛藤に苛まれる。磨耗した心にも枯れることなかった涙がトマスの頬を伝う。

突如涙を流し始めたトマスに戸惑う美女をよそに、トマスは庭園の敷石を一つ起こして剥がすと、それを地面に叩きつけて割った。

「どつしたの、トマスっ!？」

突如庭を破壊し始めたトマスの行為に戸惑い、制止をはかろうとする美女。

それに対し、その場でしゃがみ込むと割れた庭石の欠片を物憂げに眺めるトマス。いくつかの欠片を手に取りながら、トマスはゆっくりと口を開いた。

「君は、こんな血に汚れた僕を愛してくれた」

トマスが手にしていた、小さく尖った石の欠片が、涙に黒く濡れる。

「そんな君の愛に、なんでだろう僕は大きな安らぎを感じたんだ」

訥々と心の内を語りだしたトマスの言葉に、美女は身じろぎ一つせず、耳を傾ける。

「あまりにも暖かくて、あまりにも優しくて、僕は、僕は……」

立ち上がったトマスの足は土の地面が露わになり、彼の滂沱で黒ずんでいる。その地面を一步また一步と踏みしめながら美女へと歩み寄るトマス。

「僕は、僕を忘れそうになるところだった」

顔には数多の感情をないませにした様な凄烈な表情を浮かべ、手には彼の意志の強さを反映したような尖鋭な石片を携えていた。

「まるで、ここが僕の居るべき場所であるかのように、僕の心は君で満たされていた」

素直に吐露されたトマスの言葉を受けた時、初めて美女が口を開

いた。

「それは！」

美女は語気を荒げ、続ける。

「私が！私とあなたがっ……っ！」

しかし悲壮な表情を浮かべる美女の口は途中で噤まれた。視線を泳がせながら語の継ぎ穂を探すが見つからず、紡ぎかけた言葉が宙に落ちる。

美女がなにを訴えようとしているのか。その意を汲み取るうとトマスに僅かな逡巡がよぎるが、それも一瞬のことに終わった。今成すべき贖罪を前にして選べる選択肢などトマスは持ち合わせていないからだ。

視線は美女を捉えながらも、その実虚ろを射ぬく瞳を滲ませたトマスの、鋭利な石片を携えた右手に力がこもる。気力ともども振り絞るようにして、トマスは決意を口にした。眼前の美女に許しを請うように。

なにより、自らを慰めるように。

「ホントはもう覚えちゃいないんだ。でもっ。それでも！僕には贖わなければならぬ罪があった！そして、贖罪を果たした先に待つ何かがあったはずなんだ！」

トマスの涙で黒く濡れた地面に新たな色が混じる。赤黒いそれは、石を堅く握りしめた右手から滴るトマスの血だ。

「だから!!」

トマスの魂の叫びに、美女は返す言葉を持たず、ただあふれる涙で返した。

「うおおおおおおおっ!!」

怯えを打ち消す雄叫びをあげながら、足を踏み出したトマスは、手に血が滲むほど強く握りしめた石の切っ先を美女の左胸に突き立てる。命を貫く感触が手から全身を駆け抜け、すりつぶされるような痛みがトマスの魂を蝕んだ。一突きに体重をかけたトマスはそのまま美女押し倒すような形になって、後ろの花壇へと崩れ落ちる。

二人の人間が倒れ込んだ衝撃で散った花卉が世界を鮮やかに彩る様に舞った。

トマスの一撃は美女の肺まで達していた。

「ト……マ……ス」

流れ出る血液は真っ白なドレスを醜悪な赤に染める。それは目減りする命を表す色だ。

徐々に自らの存在が薄まっていく生命の極限ともいえる時の中あって美女は、慈愛に満ちた笑顔を湛えていた。

幾度も自らを蝕んだ心の激痛に再びさいなまれながらトマスは美女に問う。

「なぜだ」

自らの贖罪のためだけに、傷つけた人に。心を突き動かす得体も知れない情動を鵜呑みにして、自分本位に殺めた人に。愛を注いだ相手に裏切られ、魂を汚されたにも関わらず、それでも笑顔を向けられる美女に、トマスは問いを投げかける。

「なぜ、君は笑えるんだ」

「決まってるじゃない。嬉しいからよ」

美女は物わがりの悪い幼子に諭すように語る。

「貴方が今までなにをしてきたのか、それがどれだけ貴方の心を傷つけ、魂を削り、生を否定してきたのかを私は知っている」

「君は……いつたい」

「それだけの地獄を貴方が歩み続けてくれたから」

美女の笑顔に涙が付け加えられた。

「やだ、最期なんだし、泣き顔なんか見せたくなかったのに、嬉しくて我慢できないわね」

「君は誰だ!!」

トマスの直感が美女の言っていることを理解したくないと強い拒絶を表す。

それでも彼女の笑顔が、涙が、無慈悲にトマスの記憶を解きほどこいていく。

美女も知っているという、自分が歩んだ修羅の道。それをなぜ僕は歩き続けたのか。なぜそんな道を歩むことになったのか。幾星霜の時を経て、数え切れぬほどの激情に駆られた果てで、記憶の彼方に打ち捨てられた想いが甦る。

「貴方が地獄を越えて、もう一度私に会いに来てくれたから。それだけで、私はもうなにもいらぬ位幸せなのよ」

気管を埋め尽くす死の赤と歓喜に震える嗚咽とで、満足に言葉を発せられぬ美女は、それでも自分の気持ちをまっすぐに伝える。

愛する男へ。

自分を全身全霊で愛してくれた男へ。

自らの魂に刻まれていた本当の愛を思い出したとき、トマスはもはやなにも考えることができなかつた。ただただ、止まる事のない涙があふれ出るだけだ。

百の屍を自分は越えていたというのか。

地獄から這いでた先はさらなる地獄だったというのか。

「ねえ、トマス。最期に一つお願いがあるの」

とうに赤みを失い、死人のそれに近づいていく顔色を隠すように
気丈であり続ける美女は、笑顔を絶やすことはない。

「最期に、最期に一度でいいの。名前を呼んで、トマス」

贖罪を与えた王に、凄惨な運命を課した神に、そしてなにより信
じ続けると誓った愛を忘れてしまった自分への怒りとやるせなさに
トマスは翻弄されていた。

心の内に膨大に沸き上がる悲しみで、トマスの心は動くことをや
めようとしていた。しかし。しかしどれでも、トマスの魂は輝きを
失う前に、今一度逞しくあり続けようとした。

トマスは自らに強く言い聞かす。

今、僕のすべきことは感情に振り回されて慟哭を続けることなん
かではない。

地獄の果てで突きつけられた黒く、深く、昏い憎しみと怒りが心
に渦巻きながら、それでもトマスの心が、魂が、壊れることなくあ
り続けられたのは、愛のなせる業か。

涙は止まらなかった。

それでもトマスは必死に頬をつり上げ、相好を崩す。

今生の別れを笑顔で彩るために。

「愛しているよ。フィリア」

最愛の人の名前を涙とともに紡いだトマスは、生涯最高の笑顔で浮かべていた。

「私もよ。愛しているわ、トマス」

そう告げると、笑顔を絶やさぬまま、眠りにつくようにフィリアは息を引き取った。

「フィリアーーーーーッッッ」

そこに残されたのは、トマスとフィリアの思い出を象った庭園の姿をした地獄に響く一匹の獣の咆哮だった。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6697i/>

荒野を往く咎人

2010年10月15日22時23分発行